この夏、甲子園から　・・・・岡本　直

やや時期を逸してしまいましたが、今回は建築の話題から離れ、「がんばろう日本！」のスローガンのもと、東日本大震災の被災地の復興支援の大会と位置付けられた、夏の甲子園の高校野球にまつわる話をさせて頂きます。

この原稿を書いているとき、テレビからは決勝戦の熱戦を伝えるアナウンサーの声が聞こえてきます。今年の決勝は節電のため午前開催と異例の措置がとられました。大会は東北からのチームも、震災に負けない精神力を発揮して活躍し、例年以上に盛り上がりました。試合も終盤までもつれる熱戦が多く、目の離せないスリリングな展開が続きました。その中を全試合に登板した吉永投手を擁する日大三高が見事、優勝を果たしました。

毎日新聞の夕刊（8/18 付け）に「野球王国」は最近聞かれなくなった言葉の一つだとの記事が掲載されていました。「野球王国は全国的にみて強い高校が複数ある都道府県で、春夏の甲子園でどの学校が代表になっても、ベスト４は期待できるという感じか。一つの学校だけがめちゃくちゃ強いのではなく、どこが出てもある程度は勝ち進む、というところがミソだ。」とあります。では、なぜ、野球王国という言葉が、あまり使われなくなったのか、野球留学の是非もありますが、情報化が進み、野球レベルの均衡化により、強い地域を特定しにくくなったからではないでしょうか。

しかし、地域の学校が活躍すれば応援したくなる素朴な気持ちは誰もが持っています。また、昔のはやり歌を聞くと、時空を超えてその時代の記憶が蘇るように、暑い日差しの中、ひたむきにプレーする球児の姿をみれば、幾つになっても昔の夏休みの記憶が彷彿と湧いてきます。私も、甲子園の歓声がテレビから流れてくると、高校時代に柔道部の夏合宿で体力を消耗し、病院のベッドで栄養剤の注射を受けながら聞いたラジオ放送を懐かしく思い出します。報徳学園が、延長戦で奇跡の大逆転を果たした球史に残る試合でした。

今回の地震で被災された地域の復興には、まだまだ時間がかかると思います。この大会が被災された方々の大きな励ましになって、困難な状況を乗り越え、甲子園の熱戦を安心して楽しめる日が、早く戻ることを祈らずにはいられません。そのためにも、月並みですが、被災した地域も免れた地域も絆を深めて、復興のために知恵と力を出し合うチームワークの大切さを高校野球から学べたように思います。